「自閉スペクトラム症児に対する「適応的支援」の再考～社会的価値創造をもたらす葛藤図式の視点から～

○発表者名　一般社団法人ほどきのとっと・臨床心理士　前岡　良汰

１．問題提起

近年の自閉スペクトラム症（以下、ASD）児の増加に伴い、社会適応に関する支援がますます求められるようになっている。ASD 児の適応ができない事象に対して、多くの支援では、「適応」が可能になることを最終目標とする支援（以下、「適応的支援」）が目指される。例えば、人に暴言を吐いてしまう ASD 児に対して、暴言が見られなかった時に、トークン等の代替貨幣や他者からの称賛を得ることで、「適切」な言動がなされる姿へと導くのである。

この「適応的支援」は、幅広い支援者によって理解・活用がされ、実践現場で有効的な場合もある。しかし、盛（2015）は社会的背景を重視した上で批判的に捉えている。後期近代社会では、多様な価値観が尊重される一方で、ASD 児は健常児とは異なる特性があることで、差異が強調されるようになり、メインストリームから切り離された。コミュニケーションを中心として成り立っているマジョリティとの圧倒的な力関係を前に、社会からの排除を経験するリスクは非常に大きい。「適応的支援」は社会を問うことなく、社会に順応するという意味で、ASD 児を排除する社会の再生産に加担している可能性がある。

そこで盛（2015）は、葛藤図式という「既成の価値とは異なる新たな差異を生み出す主体が、既成の価値と衝突しながら自己を形成していく」ような発達観を内包させた理論を提案する。支援の中で起こる葛藤自体への意味づけを通して、ASD 児が社会で支配的な既成価値を変容させ、新たな価値を創造する主体として発達することを、支援の中軸に据えるのである。

先行研究において、葛藤図式の視点から ASD 児を巡る葛藤を通して排除に抗する社会を検討した研究はほとんど見られない。唯一、劉他（2011）の研究では、「居場所づくり」の場において、ボランティアの視点から ASD 児との関わりの中で感じられる葛藤を描き、それ自体がインクルーシブな社会の条件になりうるとして積極的な意義を明らかにしている。

しかし、①価値の創造について触れられていないこと、②支援者による支援について言及されていないことにおいて、限界が見られる。

２．目的

本研究の目的は、葛藤図式の視点から ASD 児によって新たな社会的価値が創造される支援の様相を明らかにし、支援者による支援の在り方を検討することである。

３．方法

対象児は、特別支援学校中学部１年生の男児（Ａ児）である。人との関わりを強く求める一方で、うまくいかなさや恥ずかしさを感じやすい繊細な気持ちがあり、相手を傷つける言葉が出たり、衝動的に手や足が出ることもあった。

分析資料として、放課後等デイサービスを利用するＡ児と支援者の筆者との関わり合いについて、2021 年 6 月（小学 3 年生）から 2025 年 11 月（中学 1 年生）までの記録を使用した。

分析方法として、劉他（2011）の研究を参照しながら、エピソード記述を基に、実践を分析する。エピソード記述とは、「問題意識や基本的な問いとの関連で、その描き出された生の断面の「意味」を掘り起こ」すような記述（鯨岡，2005）であり、研究的な問いを踏まえながら、人の生に関する豊かな実相を分析していく方法論である。

４．成果・課題

＜結果＞

『エピソード①』: 謝罪の「『あ』のつくやつ」

円滑な関係づくりのためには、具体的な行動それ自身が望まれるだろうが、謝罪は、目に見える行動以上に、行動に伴う情動が重要になる。A児からの発言は定型的な表現でなく、気持ちの揺れ動きによるA児なりの独特な表現だからこそ、「『あ』のつくやつ」には、自分事として謝ることに向き合う姿勢を感じ取ることができる。つまりA児への支援としては、適切な言動がなされるかどうかに焦点を当てる前に、相手へ気持ちを向けようとするA児の気持ちの揺れを見出し、支えることが重要になると考えられる。

『エピソード②』: 感謝の「『あ』のつくやつ」

言葉による葛藤が見られるA児から、言葉に対する感性が感じ取られた。「ありがとう」では強いが、「『あ』のつくやつ」や「ありがとうのやつやってあげる」はちょうど良いというように、自分の感覚に合う言葉を探していたように思われる。特に「バカ」等、荒い言葉を頻繁に使用していたA児が発した言葉だったため、A児の言葉への感性は理解されにくいだろう。しかしA児ならではの言葉に対する感性に気づくことで、A児への捉えが広がるように思われた。つまりA児への支援は、豊かな言語的感性のあるA児として捉えて関わる方向性が考えられる。

『エピソード③』: からかいの「バッターアウト」

「適応的支援」では、からかいを減らし、「適切な」関わりを促す支援が求められるだろう。しかし、葛藤図式を通して認識できたのは、「ずれた」関わりによって、からかいを共有する支援であった。筆者はA児が思ってもみないような返し方を意識し、A児は、言葉を変えながら関わりを模索していくことで、固定化された関わりが「ずれ」、「バッターアウト」のからかいを見出した。「適切な」関わりは、「不適切な」関わりという否定的対象ができるが、「ずれた」関わりは、価値判断を留保しつつ、これまでと異なる新たな世界を見つけ出す試みを意味する。

＜考察＞

社会的価値の創造の意義は、以下の 2 点がある。1 点目に、自らの無自覚的排除観に向き合えることである。筆者は、批判的に論じていた「適応」の価値の内面化を実感した。新たな価値によって、支援者としての筆者が無自覚に「適応的支援」を求めてしまう心性に直面することになり、自らの支援を問う機会になった。2 つ目に、新たな社会的価値は、葛藤を続けるための支えとなることである。関わり続けた「結果として」生じた昇華に関しては、ASD 児やその支援に対する捉えを更新し、他の葛藤を支える一助となる。また新たな価値が創造されると、既存の価値を超えた観点から意味づけがなされ、改めて葛藤を抱え直す契機となりうる。

＜課題＞

1 点目に、非言語的な支援の在り方が検討できていないことである。ASD 児に対しては、発語が困難な事例も想定されるため、非言語的な支援の様相についても、葛藤図式に基づいた分析を行う必要がある。2 点目に、新たな価値の変容を分析できていない。新たな価値の変容によって、支援者に根付く子ども観や支援観にどう影響を与えるのかは、支援者のアイデンティティに関わる重要な問いである。今後、さらに実践を重ねていく中で明らかにする必要がある。

＜引用文献＞

鯨岡　峻（2005）．エピソード記述入門―実践と質的研究のために―　東京大学出版会

劉小賀・榊原久直・中村美智子・江角彩・高橋眞琴・盛敏・清水伸子・津田英二（2011）．インクルーシヴな社会をめざす実践における葛藤の積極的な意味―自閉症児のストレス表出に対する他者の反応をめぐる考察―　神戸大学大学院人間発達環境学研究科　4（2），39-48.

盛　敏（2015）．自閉症スペクトラム障害児をめぐる差異化と排除の構造―後期近代社会が求める社会性の発達をめぐって―　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，8（2），1-14.